

## ●番所で人の往来監視

旧飢肥街道は、現在の県道宮崎北郷線とほぼ同じルートである。昔は今の宮崎市鏡洲から清武町の中心地・中野に至り、飢肥藩の城下と藩領の北の関門・清武を結んだ。

現在は宮崎市の側から登っていくと、椿山公園が開かれていて双石山の景観と、ツバキの花を楽しむ自然休養林となっている。一方、北郷町からのコースは、蜂之巣の切り立ったがけを見ながら、ホテル北郷フェニックスの下を通って、山仮屋の峠を目指すことになる。

十六世紀末ころには、飢肥藩の主要街道として整備されていた。山仮屋は、その名の通り、峠に藩の番所が置かれていて、十数人の藩士が配属されていた。清武と飢肥城下との人の往来や、藩の専売品など物資の移動を監視する番所で、高鍋藩の藩主も、飛び地の櫛間（今の串間）地方を巡視するときは、この街道を通して、こ

に一泊した。飢肥藩は、城下からおぜんや風呂おけなどを運んで接待したという。

飢肥藩主の参勤交代の行列もここが休憩地であった。そのため、番所役人の梶谷家には、便所が六カ所備えてあったといわれる。

幕末に変名で飢肥藩領を探索した鹿児島藩士・名越時敏は「鶴戸詣道の記」に「(山仮屋)には関守あり、番する処には九曜の紋(実は十曜の紋)を染め出した幕を引回し、鉄砲などいかめしくかさしてあった」と記している。

番所跡は、県道わきの案内板から四百五十メートルほど登ったところにあり、今も石垣が残っていて、町指定史跡となっている。

道は明治二十年代に整備され、昭和初年に日南海岸沿いの国道が整備されるまでは、山仮屋越えが日南と宮崎を結ぶ幹線となっていた。

一八九二(明治二十五)年には県内で初めて



本県で初のれんが張りのトンネル。文化遺産としても貴重

トンネルが完成。内壁がれんが張りで、工法としても貴重な文化遺産とされ、一九九八(平成十)年、県指定有形文化財となった。県道の途中に案内板があり、そこから旧道に入ると百年を経た今も、昔のままのトンネルを見ることが出来る。

一九(大正八)年には、飢肥小玉自動車定期便を運行、宮崎まで三時間余で走った。

このコースは、山並みと緑の美しさが印象的で、季節ごとに行楽を楽しむ人たちも多い。今も歴史の道、ウォーキングコースとして隠れた人気を保っている。

長友禎治